



港区内の銭湯で
北海道豊富温泉の
体験ができます!



記者発表で、実際の豊富温泉の湯を見せながら説明する武井雅昭港区長

行政が仕掛けたビジネスモデル

今年2月、北の大地で湧出するアトピーに効能の高い名湯を東京都心の銭湯で体験できるイベントが行われました。その温泉とは豊富温泉。北海道豊富町と港区をつなげたきっかけは、国産間伐材を活用した地球温暖化対策の取り組みでした。豊富町ではこのことをきっかけに間伐材を活用したお箸を町ぐるみで商品化し、一つのビジネスモデルをつくりました。そして、両者の連携は別の分野にも広がり、温泉水を活用した銭湯イベント開催までに至りました。港区の取り組みから、新たな全国連携の在り方を探ってみました。

1+1が3になる相乗効果も

アトピーに救いの湯が港区に来る

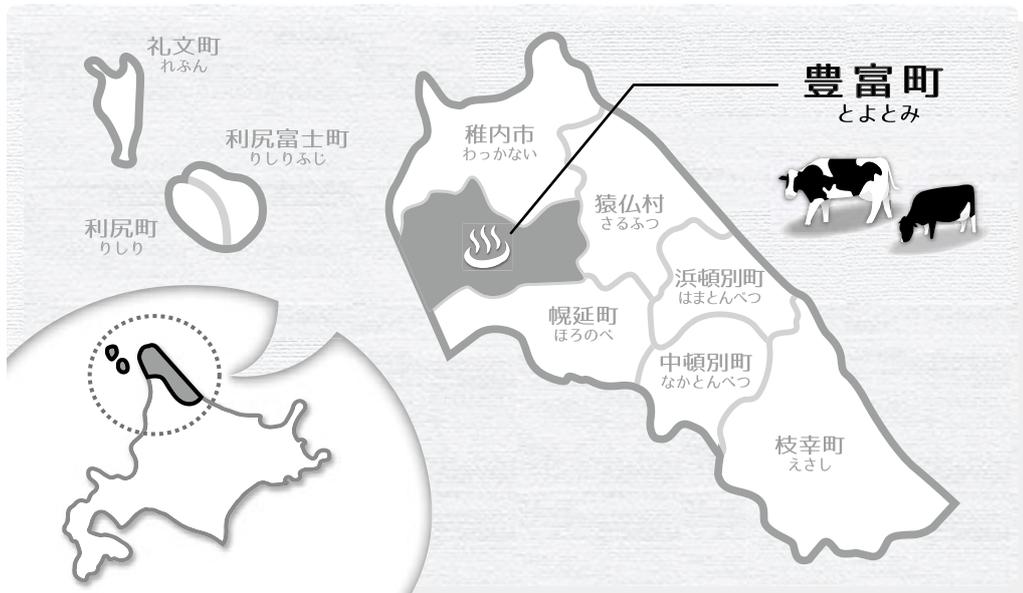
「いい湯だな〜」

今年2月18日から26日まで、港区にある5カ所の銭湯のうち4カ所（残り1カ所は元々、天然温泉）で、北海道・豊富温泉の湯を体験できるイベントが行われました。港区、北海道豊富町、東京都公衆浴場業生活衛生同業組合港支部の3者が連携したイベントです。

「豊富温泉」と聞いて、どこにあるのか、どんな温泉なのか、ご存じでしょうか。豊富町は、日本最北端の街・稚内からJR宗谷本線の特急で40分、札幌からだの特急で約5時

間もかかる遠い町です。豊富温泉は世界でも珍しい油分を含む泉質で、成分に多く含まれるメタホウ酸、メタケイ酸、マグネシウムは皮膚を綺麗にし、殺菌効果が高いそうです。特に豊富温泉の最大の特徴である油分は、保温保湿効果が高く、油分に含まれるタールは抗炎症作用を發揮し、アトピーや乾癬かんせんなど皮膚病に効能が高いことで有名です。温泉療法医が薦める名湯百選にも選ばれています。

豊富町から「温泉濃縮水」と「スパパウダー」の提供を受け、港区にいなながら豊富温泉の名湯を味わえるというこの試み。豊富温泉の実際のお湯は、真っ茶色の油が浮かび、油



の臭いが特徴的ですが、イベントでは、家庭用の温泉濃縮水を使用するため、油分はありません。

また一部の銭湯では、豊富町のもう一つの基幹産業である「酪農」と

も連携し、豊富町産の牛乳を使ったアイスクリームやプリンの販売も行われました。

温泉濃縮水やパウダー、配送料などの経費は豊富町が負担し、区はPRなどを担当。特産品などは各銭湯が購入・販売しました。

国産間伐材の活用がきっかけ

これまでも港区は、きっかけや目的は異なりますが、様々な分野で全国各地の自治体と交流・連携を進めてきました。北海道佐呂間町、山形県舟形町、福島県いわき市、岐阜県郡上市とは、商店街を中心に始まった交流が広がっています。忠臣蔵や徳川吉宗、台場など歴史上のゆかりをきっかけとして始まった交流もあります。

都市と山間部の自治体が協働して国産材の有効活用を進め、低炭素社会の実現を目指す港区独自の制度「みなとモデル二酸化炭素固定認証制度」には現在、78の自治体が参加し、毎年開催する「みなと森と水サミット」には各自治体の長が集まります。

この制度では、港区と「間伐材を



平成28年11月に開催された第9回目のみなと森と水サミット。多くの首長が参加し、国産木材の利用促進について議論しました。

始めとした国産材の活用促進に関する協定」を締結した自治体（協定自治体）から産出された木材（協定木材）を港区内で使った分、協定自治体で森林更新することが約束されています。更新された若い森林は二酸化炭素をたくさん吸収します。都市と地方が連携して地球温暖化防止を目指す「二酸化炭素固定認証制度（みなとモデル）」は全国初の取り組み

です。

豊富町との交流も、「みなとモデル」がきっかけでした。2016（平成28）年4月、協定自治体に加わっていた豊富町から、国産木材使用だけでなく、他の産業・地域資源を活用した、地域を拡大しての連携・協力について提案がありました。これを受け、同年7月、港区長と北海道宗谷町村会（8町1村、猿払村・浜頓別町・中頓別町・枝幸町・豊富町・礼文町・利尻町・利尻富士町・幌延町）の首長と初めての会談が行われました。

10月には「みなと区民まつり」に豊富町や中頓別町、礼文町が参加したほか、11月には区内で利尻富士町との共催イベント「利尻島と利尻山をテーマとしたスライド&トークショー」と「利尻昆布などを使ったワークショップ」が開催されました。さらに、12月開催の「港区政70周年記念式典」では、北海道宗谷町村会として物産ブースを出展し、多くの区民でにぎわいました。

国産木材活用をきっかけとした更なる連携・協力、新たな自治体間連携の始まりです。

全国連携専管組織の立ち上げ

港区は昨年4月に専管組織として「自治体間連携推進担当」を設置しました。総合窓口として全国各地の自治体からの問い合わせなどに対応するだけでなく、相互に適した部署や連携事業への調整を行います。課長を含め職員3人が専任という体制は珍しく、機動力に繋がっています。担当者は「一つひとつの自治体を持つ資源は限られていても、互いの強みを持ち寄り、あるいは不足している部分を補い合い、基礎的自治体の横のつながりによる相互の活性化や課題の解決を目指すことができると語ります。

今年4月には、自治体間だけでなく、幅広い分野の連携を推進している実態に合わせて、組織名を「全国連携推進担当」と改称する予定です。

人が集まる自治体ならではの

港区が目指す自治体間連携は、「互いが持つ地域資源やまちの魅力を生かしながら、自治体相互の活性化や住民の生活を豊かにしていくこと」

です。それは、ただ都市と地方が何かの事業やイベントで連携するといっただけではありません。1+1が2だけでなく、3にも4にもなる効果を目指しています。

どういうことか。一つの事例を挙げましょう。

先にあげたように、豊富町は、港区との協定に基づく国産間伐材の活用をきっかけに、「おハシのかけハシ物語」という「割り箸」による「豊

豊富町の湯は、
豊富な油が特徴
で、茶色に濁った
温泉の臭いが



富猿狢森林組合」「湯治移住者」「障害者福祉施設」との連携事業を始めました。

豊富猿狢森林組合は、豊富町産シラカバなどの間伐材を活用し、割り箸として加工。木の香りを楽しめる国産の安心な箸です。間伐材の活用は、森林保護や林業育成にもつながる大切な取り組みです。箸袋のデザインは、湯治治療で豊富町に移住し

みなと森と水サミットがきっかけで、
北海道宗谷町村会長の首長と武井港区
長が初めて会談しました



たデザイナーが担当しました。そして、箸の袋詰めは、町内の社会福祉法人サロベツ・マイハートの利用者の方々が行っていきます。

こうして、豊富町産間伐材を活用したお箸のビジネスモデルが始まりました。

冒頭で紹介した豊富温泉を体験できるイベントでも同様のことが言えます。港区内の銭湯で豊富温泉の湯を体験できるイベントは、豊富町にとって都心でPRできる機会となります。将来的な移住・定住への期待もできます。一方、港区内の銭湯にとっても新たな顧客確保につながるかもしれません。そして港区民にとっては、アトピーや乾癬^{かんせん}など皮膚病に効果があると言われる世界的にも珍しい温泉を、港区にいなながら体験できるのです。

こうした行政が仕掛けた取り組みは、商業的に成り立たなければ長続きしません。

その点、今回の取り組みは、全国各地からたくさんの方が集まり、多くのファミリーが住む都心の自治体だからこそ成立する自治体間連携と言えるのではないのでしょうか。